

[088] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10178>

出版情報：語文研究. 88, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

柳川市史編集委員会編（久保田啓一解説）

柳川文化資料集成 第一集

『鶯歌集』

本書は、(株)御花蔵『鶯歌集』を翻刻、巻末に作者索引を収め、更に久保田啓一氏による綿密な解説を付した和歌資料である。『鶯歌集』は中本十九冊、近世末期あるいは明治初期の書写にかかる一〇一〇九首に及ぶ幕末期柳河藩歌壇の総合的撰集で、柳河藩最後の藩主立花鑑寛を中心し、家族や藩士、奥方付き侍女達を糾合して編まれたものである。

近年、各地の大名家が遺した文芸資料評価の気運が高まり、近世文芸において大名の果たした役割の大きさに改めて注目が集まりつつある。武士として最高の位置に立つ彼らが、近世中期以降高度の知識人・趣味人として成長し、各藩ごとに家臣を巻き込んだ文化圏を作り上げていった例は、それこそ枚挙にいとまがない程である。鑑寛公もその一人であり、公武合体派として政治的に活動しながら、これほどの規模の撰集を編み出すことのできる歌壇を育成している。

近世末期に全国に浸透した和歌愛好の風は、下級武士や神官が主たる受け皿となった国学の伝播とほぼ一体化していたが、その風潮とほとんど隔絶した状態で藩主を中心とする最

上層部の歌壇は機能している。これまで紹介されてきた和歌資料は前者の実態にこそ資するところはあっても、後者の質と規模を推測する手掛かりとはなりにくかったのが和歌研究の現状であった。しかし、その意味において、『鶯歌集』は幕末から明治維新に至るまでの一万余首もの撰集を編んだという事実、更にそれを生み出し得た歌壇の驚くべきエネルギーと規模を我々に提示してくれる貴重な資料である。

今回、『鶯歌集』の翻刻資料が公刊されたことは、幕末柳河藩歌壇の全体像の解明において、本格的調査の端緒であるにもかかわらず、その功績は非常に大きい。のみならず全国の各自治体に残存するこの種の和歌資料の公刊までも促し得る意義ある一書である。

（平成十年三月 柳川市史編集委員会 A4判 四三六頁
（作者索引十三頁）二、五〇〇円）

岩波文庫『洪江抽斎』（中野三敏注・解説）

鷗外の『洪江抽斎』と云えば石川淳も「ただちに答える、『抽斎』第一」と云う様に、所謂「史伝もの」のみならず彼の生涯を通じて最高の作であるとは識者の評の一致する所であろう。武鑑の収集中その蔵書印から抽斎を「発見」した鷗外が、自らと同じ匂いを嗅ぎ取ったこの未知の人物の探索に乗り出し、資料と証言から次第にくっきりその姿を浮かび上

がらせる探偵小説的興味といい、抽斎を描くに抽斎その人に

止まらず、その師その友そして抽斎没後の子孫にまで筆が及び、結果として江戸から明治への「歴史其儘」を抽斎に発する人間群像の裡に活写したかに見えるそのスタイルといい、今日尚読者をして魅了してやまない。こうした本書独特の成り立ちは、鷗外自ら「わたくしの書くものは、如何に小説の概念を押し広めても、小説だとはいわれまい」と記すとおり、近代の「小説」の枠に重ね見るよりも、抽斎という幕末の雅人を叙するに相応しい「文芸」のスタイルが選び取られていると見るがよからう。解説に曰く、「抽斎に幕末雅人の典型を見てとった鷗外は、その周辺にかつ消えかつ浮んだ多くの畸人群像の中にも、それと見える節を確かに感じとっていたに違いない。(中略)『渋江抽斎』という作品は、鷗外による、そのような幕末雅人群像への、一篇のオマージュだったともいえそうに思う」とはまさに至言と云えよう。

長らく斉藤茂吉の解説と共に親しまれてきた本書岩波文庫旧版であるが、流石に今日の読者にはただちに語義をはかりかねる箇所も少なからず、語注を施した新たな版が待望せられていた。成程、石川淳の言うが如く「努力のきびしさが婦女童幼の智能に適さないから」「鷗外晩年の史伝は『雁』『キタ・セクスアリス』ほど読者の数を持ちえないに決まっている」としても、本書の世界を訪う新たな読者の為、ここに中野三敏氏による注と解説とを付して版が改められたことは

真に悦ばしい。

(平成十一年五月 岩波書店 文庫判 三九〇頁 六六〇円
税別)